書　　評

新谷忠彦編.『(アジア文化叢書) 黄金の四角地帯—シャン文化圏の歴史・言語・民族』(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所歴史・民俗叢書 II) 慶友社，1998年，326 p.

I

『(アジア文化叢書) 黄金の四角地帯—シャン文化圏の歴史・言語・民族』(以下，本書と略) は，生態環境が比較的似た西南中国から大陸部東南アジア内陸にかけての地域を対象として，国境地域の研究者たちが国家ごとの公定の歴史観，文化観をむしろ相対化し，再検討することによって，東南アジアの歴史，文化についてより実態に迫ることを意図して執筆された本である.

地域研究の根底にあるのは，生態環境のうえに文化や社会すなわち地域性が形成されているという視点である．したがってそこでは，近代的制度としての国境にとらわれずに地域を理解しようとするのが一般的であった．しかし歴史学や言語学などの場合，各国が公定の歴史観をもちそれぞれの国家語を発達させてきたので，事情が異なっていた．国境地域の研究者はしばしば辺境の研究者として位置づけられ，またそれぞれの学問分野のなかでも周辺的に位置づけられてきたのである．そこで本書のように，歴史学や言語学の研究者が中心となって，国境地域をある社会的，文化的な地域圏として提唱して再解釈する作業は，従来の言語学や歴史学のあり方に対して挑戦的な意味を持っている.

題名にある「黄金の四角地帯」という耳慣れない地域名も挑戦的である．タイ，ラオス，ビルマの国境地域を示す「黄金の三角地帯」という名称なら，闇の世界との関係を連想する多分にミステリアスな地域名として広く知られている．編著者の新谷によると，「黄金の三角地帯」に中国の雲南省の一部を加えた文化的・歴史的に共通性をもつ地域圏，それが黄金の四角地帯である．このように，東南アジアや東アジアでもない，いずれの国家名をも含まない地域名の採択自体が，国民国家の枠に縛られて実施されがちであった言語学，歴史学の従来に対する問いかけになっているのである.

II

本書は，以下の7章で構成されている.

第1章　「シャン文化圏」の概念が提唱するもの (新谷忠彦)

第2章　言語から見たシャン文化圏の民族とその分布 (新谷忠彦)

・タイ諸語 (宇佐美洋)・チベット・ビルマ諸語 (澤田英夫)・カレン諸語 (加藤昌彦)・モン・クメール諸語 (小坂隆一)

第3章　シャン文化圏から見たタイ史像 (石井米雄)

第4章　ラーンナーの歴史と文献に関するノート—チェンマイの誕生をめぐって (飯島明子)

第5章　タイ系民族の王国形成と物質文化—十三から十六世紀を中心にして (クリスチャン・ダニエルス)

第6章　シプソンパンナーの交易路（加藤久美子）
第7章　（座談会）シャン文化圏の歴史と言語をめぐって（出席者：石井米雄，新谷忠彦，クリスチャン・ダニエルス，宇佐美洋）

上記7章は，6つの論文と1つの座談会の記録からなっている．章題のなかに「シャン文化圏」とあるのは，黄金の四角地帯のいいかえであるが，シャン文化圏については後述する．

各論文が扱っているのは，言語，歴史テクスト，生業と物質文化，遠隔地交易などである．これらの各章によって，黄金の四角地帯という対象地域全体が，大伝統に統合されているのではないが，多言語，多民族，多文化要素が共存し，しかしそれらが有機的に結びつくことでひとつの複合文化交流圏を形成していることが明らかにされる．本書の記述をつうじて，単に生態環境によって規定されるのでも，特定の文化要素に基づくのでもない複合文化交流圏という新しい地域設定のあり方が示されるのである．

本書を構成しているのは上記7章のみではない．各章末に挿入されているコラムも，本書について語るうえでは重要である．コラムは，「ミス・エンの行方とゼニオロジー（新谷忠彦）」「カレン系言語の文字（加藤昌彦）」「仏教教理試験（石井米雄）」「新築祝い（クリスチャン・ダニエルス）」「橋を渡して娘の幸福を祈る（クリスチャン・ダニエルス）」「樟脳の製造（クリスチャン・ダニエルス）」の6つである．これらは生々しいフィールド経験を読者に伝えてくれる．しかも黄金の四角地帯における文化，社会をめぐる研究がどのような方向に発展していく可能性を秘めているかについても物語っている．具体的には，各コラムは本書の研究の延長に，貨幣経済の浸透と人的移動，文字の生成と体系化，国家と宗教の制度的関わり，村落における行事・儀礼の持続と再編，世界経済と周辺地域の関わり，という，より普遍的な主題があることを示しているのである．

III

しかし，以上のようなことを認めたうえでも，本書は結局，どこか辺境研究の好事家的寄合いの域から大きく出ることはできなかった感がある．つまり，黄金の四角地帯がひとつの新しい地域圏として言語学的，歴史学的に設定できることを本書は示したにすぎない．それは本書の研究において，この地域の文化や社会の時空的連続と断絶を深く掘り下げて理解する態度が中途半端にとどまっているからだと評者は考えている．そのことは，本書中で黄金の四角地帯が無批判に「シャン文化圏」と言いかえられるところに端的に現れている．

管見では，シャン文化圏という地域設定の発想は新しくない．シャン文化という言葉はすぐにリーチ (E. Leach) を思い起こさせる．リーチは，シャン社会の相対的に洗練度の高い文化と経済的な主要特徴は，アッサムから北部ベトナム，さらに南はバンコク，カンボジアへと細かく分散して広がっているとすでに述べている［リーチ　1987: 46-47］．リー

チによる地域設定は，本書が「シャン文化圏」あるいは「黄金の四角地帯」と呼ぶ前述の領域と完全に一致するものではない．本書では，「シャン文化圏」とは，タイ語系，チベット・ビルマ語系，モン・クメール語系，漢語系の 4 つの言語グループに属する多言語，多民族が微妙に交差する地域（p. 10）であり，リーチがいうシャン文化よりは多少狭められている．しかし，本書の地域設定は排他的な境界観念に基づいているのではないし，両者の中心域は大きく重なりをもつ．

にもかかわらず，本書がいうシャン文化圏は，リーチから導き出されるシャン文化圏と次の点で明確な対称をなしている．すなわち，本書とリーチの著作とでは，地域の政治的動態に対する重点の置き方が根本的に異なっているのである．

リーチは，現代のシャン文化は小規模な軍事的植民地と山地民との長期にわたる経済的相互作用の結果固有に育ったものであり［リーチ　1987: 45］，河谷のシャンは何世紀も前から絶えず山地の隣人たちを同化してきた［リーチ　1987: 47］とみなしていた．一方，本書においては，シャン文化圏の民族間には役割分担があり，当然そのあいだに主従関係も存在するが，必ずしも民族間の対立関係があるわけではない（p.13-14）と述べられ，各民族の役割分担と主従関係の実態については詳述されない．むしろ本書はあたかも，シャン文化圏における各民族の牧歌的すみわけを前提としているかのように記述されている．また，本書 2 章で展開されるこの地域のさまざまな言語，文字，民族の分類と羅列も，そうしたイメージを読者に植えつける見取り図のように作用している．

評者が思うに，本書がシャン文化の概念をリーチから借用するからには，山地民の政治行動について関心外におく理由を，どこかで説明しておくべきであった．なぜなら，その点にこそリーチは特に注意を払ってきたからである．そのことによってリーチは，ある社会にはそれに対応したひとつの社会構造があるという従来の構造機能主義を批判し，のみならず民族という範疇は本質主義的に規定できるものではなく，動態的に構築されることを実証できたのであった．しかし，本書においては，基本的に民族が本質主義的に扱われている．また本書の記述が，盆地で灌漑水稲耕作を営み，長い間この地域で民族的にも政治的にもマジョリティであったタイ系民族を中心に据えているためか，山地における民族間，民族内の政治的動態が本書では表にほとんど出てこない．

Ⅳ

しかし現在もシャン文化圏の山地民と平地民の間にあるのは，きわめて政治的な平衡関係と拮抗関係である．たとえば北タイでは森林資源の管理をめぐって，山地民を生態系の破壊者として位置づける平地民と，各種森林産物に依存しなくては生活していけない山地民との間にしばしば緊張が生じ，地方政府や国家を巻き込んだ法的，政治的解決が求められている．こうした事態に目を向けるだけでも，本書の研究がリーチの視点を再検討したうえで，民族間のすみわけの背後にある政治性をもっと鋭く見つめる必要があったこと

は言うまでもない．黄金の四角地帯は，国家を中心に据えた言語学，歴史学などの研究者にとっては辺境であっても，世界システムの周辺に位置するからこそ，しばしば開発援助という目的で国際的な資金が集中的に投入されている地域でもある．もっともこのことを本書が認識していないわけではなかった．実際，「黄金の四角地帯の現状は（中略）関係する四カ国の政治的な思惑も絡み，更には，国際政治の影響も無視できないなど様々な要素の絡んだ地域である」（p. 10）と本書で新谷は述べているからである．しかし，具体的に本書がこの点に踏み込むことはなかった．

本書が刊行されて3年を経た今，評者が本書について論評しているのもこの点と関わっている．すなわち，黄金の四角地帯ではこの3年の間にもますます国際政治の影響が無視できなくなりつつあり，それに応じてその地域の住民がそれぞれの立場で政治行動を起こしている現実もますます露呈しつつある．そうでなければ現地の住民は自分たちが生活していくための権利を保護されない．こうした状況のなか，民族をめぐる政治についての洞察はいっそう必要とされているのである．その観点から本書を振り返れば，本書が黄金の四角地帯に居住する人々のそうした政治的動態にもっと深く焦点を当てていれば，辺境研究の好事家的寄合いにとどまることがなかったであろう．一方，今後についていえば，本書の研究の延長がそこを正面から見据えてこそ，国民国家の枠組みに縛られた従来の学問枠組みに対抗する力を発揮し，辺境研究の従来的辺境性から大きな一歩を踏みだすことができるのである．

引　用　文　献

リーチ，E.R.　1987.『高地ビルマの政治体系』関本照夫訳，弘文堂．(Leach, E.R. 1970. *Political Systems of Highland Burma*. London: Athlone Press.)

（樫永真佐夫，国立民族学博物館）

Mary Beth Mills. *Thai Women in the Global Labor Force: Consuming Desires, Contested Selves*. New Brunswick, New Jersey and London: Routgers University Press, 1999, xv＋218p.

タイでは輸出型製造業に転換した1970年代以降，女性の移動労働が増加している．首都バンコク周辺には繊維業を中心とした工場が次々に建設され，手先の器用さや時間的余裕から，扶養家族のいない未婚女性が労働力として求められた．周知のように，製造業における「労働力の女性化」は，タイに限られた問題ではない．現在，日本や欧米で消費される繊維製品の多くは中国や東南アジア，あるいは中南米諸国製で，いわゆる「途上国」にとって共通した現象であるといえる．

本書は，この「労働力の女性化」に付随した女性の移動労働について論じた民族誌である．著者のマリー・ベス・ミルズは，アメリカ・メイン州コルビー大学人類学科の準教授である．これまでミルズは，東北タイにおける女性の移動労働について研究を展開し，タイのジェンダー研究に新たな見方を提供し